村松久史・光田　寧両教授の御退官によせて

村松久史先生，光田寧先生には，平成9年3月31日をもって京都大学を停年退官され，京都大学名誉教授となられました。両先生には防災研究所における研究と発展に多大のご尽力をいただき，そのご功労に対しまして心から感謝の意を表したいと思います。

村松久史先生は，長野県立飯田高松高校を卒業されたのち，京都大学理学部地球物理学科へ入学され，昭和32年に同学科を卒業されました。昭和32年4月に運輸技官行政職に採用され，気象庁高層気象台に配属されましたのち，昭和35年7月には研究職に変わられ，昭和36年4月に研究官に昇任されました。昭和52年6月に気象研究所研究官に転任され，昭和46年4月に主任研究官，昭和51年3月に研究室長，昭和60年4月に研究部長へと昇任されたのち，昭和62年4月に京都大学防災研究所教授に転任され，平成9年3月に停年退官されました。京都大学防災研究所では，昭和62年4月から災害気候研究部門の主任を勤められ，平成8年4月からは大気災害研究部門長をされました。この間，大気組成物質の気象・気候へ与える影響に関する研究，局地の気象・気候の研究，熱帯・極地を含む大気の循環と気候変化の研究などを推進されてきました。

村松久史先生は，学術研究および教育の各分野におきまして多くの業績を挙げられるとともに，大学の管理運営面におきましても多大の貢献を果たされてきましたが，主なご功績を示しますと，次の通りです。

研究面におきましては，大気オゾンの分布・変動に関する観測・理論的研究，温室効果気体の観測および理論的研究を主とする多くの研究を行われました。これらの研究においては，オゾンの高度分布測定のためのオゾンゾンデの開発・改良・測定および理論的研究によりオゾンの高度分布とその変動を明らかにされました。大気オゾンの地球規模での循環に関しましては，成層圏と対流圏の間の輸送，対流圏から地表への輸送過程を明らかにされました。また，大気オゾン濃度に影響を与える物質として，フロン，メタン，亜酸化窒素，水蒸気等の分布の観測およびそれらの物質のオゾン層への影響を明らかにされました。一方，これらの物質の赤外放射とその温室効果に与える影響を明らかにされるなど多くの成果を挙げられました。

一方，教育面におきましては，大学院理学研究科の指導教授として多くの大学院生の教育と研究指導を行われ，学部学生の教育にも努力されました。

また，日本気象学会，日本大気電気学会，日本分光学会などの会員として活発に学会活動を行われ，昭和63年から2期4年間にわたり日本気象学会関西支部長を務められ，気象の研究・普及の推進に尽力されました。さらに，国立極地研究所の専門委員として南極での大気組成の観測・研究を推進されるとともに，通商産業省の化学品審議会委員，環境庁の成層圏オゾン層保護に関する検討会委員としてオゾン層の保護，研究の推進に貢献されてきました。また，気象庁気象研究所の評議委員会委員として同研究所の運営に貢献されました。

光田寧先生は，奈良県立奈良高校を卒業されたのち，京都大学理学部地球物理学科へ入学され，昭和31年に同学科を卒業されました。その後，京都大学大学院理学研究科修士課程，さらに博士課程へと進学されましたが，昭和35年3月に同課程を中途退学され，同年4月京都大学理学部助手に採用されました。昭和36年8月には防災研究所助手に配置換となり，昭和39年4月に防災研究所助教授に昇任されました。さらに昭和52年5月に防災研究所教授に昇任され，平成9年3月に停年退官されるまで，暴風雨災害研究部門の主任として暴風雨災害の研究を推進されてきました。

光田寧先生は，学術研究および教育の各分野におきまして多くの業績を挙げられますとともに，大学の管理運営面におきましても多大の貢献を果たされてきましたが，主なご功績を示しますと，次の通りです。

研究面におきましては，強風の乱流特性および局地性に関する観測研究，海面，裸地，砂漠などの各種地表面上の接地境界層内の乱流輸送現象に関する観測研究，台風の構造および風速分布に関する研究，竜巻や陣風など瞬発性異常気象に関する研究など，きわめて広範囲にわたる研究を行われ，多くの学術的成果を挙げてこられました。この間，観測に利用するための超音波風速温度計および音響探査装置（ソーダー）の開発を行われ，世界の基準となる計測器を完成されています。さらに気団変質観測計画（AMTEX）および黒河流域における地空相互作用に関する研究計画（HEIFE）などの国際共同研究計画におきましても，推進者・世話役として重要な役割を果されました。

一方，教育面におきましては，大学院理学研究科の指導教授として多くの大学院生の教育と研究指導を行われ，後継者の育成に努力されますとともに，工学研究科の授業担当として長年にわたり学生の指導に当たられました。

また，日本気象学会，風工学会，環境科学会，米国気象学会，米国地球物理学連合会などの会員として活発に学会活動を行われ，日本気象学会および風工学会では理事として両学会の発展に尽くされました。さらに，昭和55年には科学技術会議専門委員，平成8年には同会議委員を務められるなど，科学行政の分野にも貢献されています。

光田寧先生は，昭和46年には日本気象学会賞，平成8年には日本気象学会藤原賞を受賞されるなど，先生の研究は学会でも高く評価されています。

以上のように，村松久史先生および光田寧先生はいずれも学術研究ならびに教育の各分野におきまして多くの業績を挙げられ，大学の管理運営面におきましても多大の貢献を果たしてこられました。現在，防災研究所は，平成8年度の5大研究部門・5センターへの改組ならびに全国共同利用研究所への移行，平成9年度のCOE認定といった改革の最中にあります。このような重要な時期に，深い学識と豊かな経験をお持ちの両先生が停年退官されますことは防災研究所にとりましても誠に寂しい限りでありますが，今後とも防災研究所の発展のために大所・高所からのご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に，村松久史先生，光田寧先生のご健康とご多幸をお祈り申し上げますとともに，新たな環境でのご活躍をご期待申し上げます。なお、光田寧先生の奥様が難病と闘われる先生を支えられたご献身はわれわれ所員一同にも深い感動を与えるものであったことを一言付け加えさせていただきます。

平成9年5月

京都大学防災研究所所長
今　本　博　健